

Management Club Report

Mar.2007/Vol.51

Monthly Opinion 歯科医院の本分と組織力

1

歯科医院の本分を見失ってはいないだろうか

朝日新聞のコラムから

山本一力（やまもと・いちりき）という作家がいます。昭和23年生まれですから今年59歳になる団塊の世代。工業高校卒業後サラリーマンを続け平成9年、49歳のときに「蒼龍」という作品で第77回オール読物新人賞を受賞した遅咲きの時代小説作家です。

山本氏が旅行会社に勤めていた20歳のときの体験談で始まる評論が朝日新聞に載っていました。ビジネスの本質を突いた見識の高さが感じられる興味深い一文でした。

旅行添乗員の本分とは？

初めての単独添乗を控えた前夜、先輩社員から「添乗員の本分は何か」と問われ、「手近な言葉を使い、あれこれと分かったようなことを言い募った」そうですが、それを聞いた先輩は「そんな小賢しい考え方で添乗する気なら、会社を辞めろ」と険しい顔つきで言ったそうです。

元気な姿で連れ帰ることが添乗員の本分

「元気に旅に出たお客様を、元気なまま、怪我も病気もさせずに連れ帰ること。これを実行するのが添乗員の本分だ」

「サービスだの快適性だのは、すべて二の次。元気な姿で出発地点まで連れ帰ることこそが、添乗員に課せられた最大の使命、本分だと心得よ。39年前の先輩の言葉は、いまの時代が真剣に耳を傾けるべき箴言であると確信する。」

山本氏が駆け出しの添乗員時代に先輩から言われた痛烈な一言は、おそらくその後の氏の生き方に強い影響を与えたであろうことは想像に難くありません。後年世に出て名を成した山本氏の活躍振りを見れば、その先輩はまさに以って瞑すべしでありましょう。

忘れていた「本分」という言葉

「本分」という言葉をとんと忘れていました。現代ではあまり使わなくなってしまうのかもしれませんが。とても新鮮に響きました。山本氏のこの体験談